荒川洋治「宝石の写真」論
― 秩父事件首魁の写真 ―

吉田　敬

はじめに

「宝石の写真」（初出「現代詩手帖」思潮社二〇〇四年一月）は、詩集『心理』（みすず書房二〇〇五年五月）の冒頭に置かれた作品である。荒川洋治は、これまで二、三年に一冊の間隔で詩集を出版してきていたが、『心理』は、『空中の茱萸』（思潮社一九九九年一〇月）から六年後に刊行された。その間、『夜のある町で』（みすず書房二〇〇〇年一一月）、『日記をつける』（岩波アクティブ新書二〇〇二年二月）、『忘れられる過去』（みすず書房二〇〇三年七月）など評論・エッセイ集を主に出版してきた。詩集の刊行に間があいたのは、『荒川洋治全詩集』（思潮社二〇〇一年六月）でこれまでの詩作に一応の区切りをつけたためかもしれない。

「宝石の写真」は、文章が入り組んでいるため、連（パート）として区分するのは困難であるが、ここでは論を進めていく便宜上、意味の構成と空白行が置かれた位置を基準にして、次のように八連に分けて論じていくことにする。

第一連は、一行目～九行目で、日本の雑木と参考に用いた資料について語っている。第二連は、一〇行目～一九行目で、秩父事件の落合寅市について説明し、以後、移動した地所を郵便番号を交えて述べている。第三連は、二〇行目～三五行目で、島崎嘉四郎の生涯を移動した地所に基づいて語る。第四連は、三六行目～四八行目で、井上伝蔵について語った後、彼が逃亡していた北海道の地所近くの地名が、憲法第九条を連想させるものであると述べる。第五連は、四九行目～六〇行目で、島崎藤村「夜明け前」の主人公青山半蔵について語り、同様に彼が移動した地所を記している。第六連は、六一行目～八一行目で、現代に生きる少女のみさこと、ももこの住む地域の町村合併について触れている。第七連は、八二行目～八七行目で、日本でしか生まれなかったと凡庸な雑木を語り、景色に重ねて表現する。第八連は、八八行目～九九行目で、さちこともこの住む瑞穂市から眺めながら、地名とそれぞれの意味を山々の景色に重ねながら宝石の写真について語るのである。

「宝石の写真」の前半は二つのモチーフで構成されている。一つは秩父事件にかかわる三人の人物の物語であり、あと一つは、島崎藤村の「夜明け前」の主人公青山半蔵の生涯の物語で、それぞれの人物が移動した地所を郵便番号をまじえて描くものである。これらの物語は雑木のエピソードによって関係づけられている。また、秩父事件や「夜

明け前」の人物の生き方にないあわされるようにして、現代の二人の少女の日常生活が描かれる。最後にそれぞれの物語に埋め込まれた意味を統合し、情景化して主題へと導くのである。この論では複数の物語の関係に注目しながら、布置された隠喩をつなぐことによって解読し、作品の意図をさぐる一考察に充てたい。

一　平凡な宝石

「宝石の写真」の冒頭は、次のように多くの比喩を組み込んだ文章で始まる。

コナラ、クリ、クヌギなどの宝石
崩壊をのりこえて列島各地へ散らばった人の、七つの沼の、七つの数字
明治一七年の墓石　コナラ、クリ、クヌギなどの宝石
以下、波に浮かぶまでの長い
切手の道

（一連一行目～五行目）

コナラ、クリ、クヌギは、古来から日本列島各地の山野に自生するブナ科の落葉高木の雑木である。「宝石の写真」の主な舞台となっている埼玉、長野、山梨、岐阜などの山国では、これらの樹木は焼炭の材料として利用される。また、カシやクヌギ、ナラなどの乾果は団栗（どんぐり）と俗称で呼ばれたりして、凡庸さの象徴でもある。平凡な山国の人々が突然秩父事件という歴史的事件を引き起こす。事件の首謀者は、困民党総理の田代栄助をはじめとして、小林酉蔵、加藤織平、新井周三郎、高岸善吉、坂本宗作、菊池貫平（甲府で逮捕されたが、無期刑に減刑され、一九〇五年出獄し、一九一四年に死去）、井上伝蔵（北海道に逃亡）、らの七人である。「宝石の写真」の登場人物の三人は、革命本部解体後、軍隊、警察の追跡[1]を逃れて逃亡した。埼玉県吉田町椋神社を中心に鳥瞰すると、秩父横瀬村（現横瀬町）には「姿の池」がある。北側の群馬県との県境に神流湖、西側に秩父湖、南側に奥多摩湖があるが、秩父には当時水田耕作のため大小さまざまな湖沼が散在していたはずである。死刑を宣告された七人の沼を到底特定することはできないが、死刑宣告を受けた人たちは、七人七様の悲しみに閉ざされた深い沼[2]ともいえる境涯に身を置くことになる。「宝石の写真」は、彼等が死をむかえるまで滞在した地所を郵便番号という七桁の数字で記された道、「切手の道」（一連五行目）の物語である。そして、彼等は自由民権運動の礎として、真っ赤に燃える木炭のように命を輝かせて宝石の墓石になるのである。

明治一七年に起きた農民一万人もの蜂起といわれる秩父事件は、重罪二九六人、軽罪四四八人、罰金科料二、六四二人の記録を残している。蹶起には三千人の決死隊が集結したとされる。

二　平凡な人たちの壮絶な生涯

（一）秩父事件

落合寅市については次のように語られる。

落合寅市は、嘉永三年３６８－０１０３小鹿野町般若の生まれ、３６９－１５
０３吉田町下吉田で炭焼き、蜂起では副隊長。銃撃戦のあと、高知県土佐山村
に逃れる。
「土佐山村の土佐山なら７８１－３２０１、それ以外の村内なら７８１－３２
００～３２２３の間になる……」

（二連一行目～五行目）

落合寅市は、一八五〇年九月一七日武蔵国秩父郡に生れた。一八八四（明治一七）年自由党に入党し、秩父困民党の借金据置・年賦返済の請願運動を推進する。一八八四年一一月秩父事件では乙大隊副長を務め政府軍と戦った。二月四日の本陣解体後、高知に入って板垣退助ら民権運動家の保護により高橋簡吉宅に匿われた。一八八五年四国から大阪に渡り、大阪事件に連座して下関で逮捕された。拷問の取調べに対してあくまでも愛媛県の別子銅山に潜伏したと自供した。自由民権家に、官権による被害が及ぶのを怖れてのことである。一八八九年大日本帝国憲法発布の大赦によって出獄後故郷秩父に帰り、救世軍に入って余生を送ったとされる。一九三六年六月二六日八七歳で死去。

そして、島崎嘉四郎についても同様な語りで続ける。

島崎嘉四郎は３６９－１５０５上吉田の生まれ、主に３６８－０１１５小鹿野
町日尾、３６８－０１１４小鹿野町藤倉などを歩いて同志を集め、本陣崩壊後
は３８４－０５０２長野県佐久町大日向、同町３８４－０５０３海瀬、３８４
－１１０１小海町東馬流と転戦、３８４－１３０５南牧村野辺山の戦闘で消息
を断った、とされたが、のち、甲府に千野多重の名で姿を現わし、乗合馬車の御者となる。

大正八年没。墓石（半分が宝石）は４００－０８６６甲府市若松町。墓石は縦、
宝石は横。縦笛を吹く。
その人生、「３」内におさまって移動、乗合馬車は「４」。そして
その「４」で、
いのちの車止めとなる。

（三連一行目～一〇行目）

島崎嘉四郎は椋神社での出陣の際の幹部読み上げには入ってはいない。だが、明治一七年二月三日朝、「千鹿谷の大将」こと島崎嘉四郎

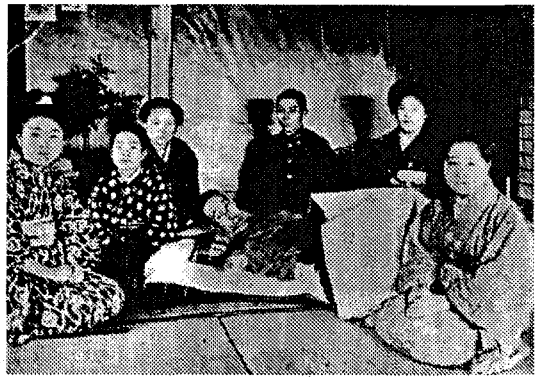
が指揮して日野村より、他の一隊（隊長不明）は石間村より進撃させて、矢内村から来る憲兵を挟撃する作戦をとった。」（浅見好夫『秩父事件』言叢社一九九〇年一一月）など、東馬流までの活躍の記録がある。以後春田国男の小説『幻歌行』（あゆみ出版一九八四年一一月）によると、丹波御祭の坂井八十吉に匿われ、たつと結ばれて、甲府金手町で千野多重に名を変え乗合馬車の御者となり生涯をおくったとされる。長く消息不明であったが、彼の死後甲府の妻から生まれ故郷に写真が送られたという。「墓石（半分が宝石）」は、秩父事件で死刑の執行からもれていたとか、出陣の際の幹部読み上げになかったとか、運動への半端な貢献をさしたものでは勿論ない。秩父事件後の足取の不鮮明さを表したものと解釈される。また、「墓石は縦」は墓石の形状を示し、「宝石は横」は、死んで横たわる嘉四郎の人物としての貢献を指すものであろう。嘉四郎については、公式文書では物色票以外に残されてはいない。

「宝石の写真」は、秩父事件の三人目の人物として井上伝蔵を語る。

井上伝蔵は、安政元年３６９－１５０３吉田町下吉田生まれ、会計長。解体後、
同町３６９－１５０３関耕地の斎藤家の土蔵に隠れすみ、そのあと北海道へ渡
り、０９０－００００北見／野付牛へ。伊藤房次郎の変名で代書業、詩文もも
のし、当地で結婚、死亡一〇時間前に、写真をとらせる。家族に、この死んで
いく男は「井上伝蔵」であることを明かす。きっぱりと話す。死ぬ。「３」か
ら「０」へ。
きっぱりと話す！死ぬ！

（四連一行目～七行目）

井上伝蔵は秩父の生糸大商店の店主であり、俳号を逸井と名乗る文化人でもあった。（北海道逃亡後も伊藤房次郎と名を変え、尚古社という俳句結社に入り俳号柳蛙を名乗っていくつかの句を残している。）伝蔵は一八八四年一一月四日、秩父郡長留村の柴原で田代栄助と別れ、武甲山に隠れたのち、下吉田関耕地斉藤新左衛門の土蔵に約二年間匿われた。行方不明のまま欠席裁判で死刑を言い渡される。その後北海道に遁れ、名を伊藤房次郎と変え、結婚して五人の子供をもうけた。大正七年六月二三日、北海道北見国常呂郡野付牛[3]村（現在の北見市）で波乱の生涯を終える。伝蔵の死の一〇時間前に撮ったとされる写真が残されている。妻ミキと五人のこどもに囲まれて布団に横たわるものであるが、カメラの方をしっ



かりと向いており「この死んで／いく男は「井上伝蔵」であることを明かす。きっぱりと話す！死ぬ！」（三連四行目）は、「宝石の写真」の標題を示す文言である。これを朝日新聞は「秘密の三十五年、秩父事件の首魁井上伝蔵、死に臨んで妻子に旧事を物語る」という見出しで報じた。

（二）「夜明け前」の青山半蔵

島崎藤村「夜明け前」（中央公論一九二九年～一九三五年）は、藤村の父正樹をモデルにして青山半蔵の生涯を、幕末維新の動乱に重ねて描いた長編小説である。木曾街道馬籠宿の本陣庄屋の嫡男として生まれた半蔵は、平田派の国学に心酔して王政復古を望む。大政奉還が実現して半蔵は大いに喜んだ。彼は新政府に協力し、相次ぐ改革を受入れ村人を説得する。しかし、新政府の政策は彼の期待に沿うことはなかった。農民一揆で百姓に失望し、木曾山林事件で政府に裏切られる。彼のなかに育まれていた御一新の理想が消え無念さに苦しんだ。青山家の経済的破綻、家庭の不幸に見舞われ、上京して教部省に勤めた。西洋一辺倒の文明開化と平田派の没落は、彼をさらに苦しめる。世のなかを憂慮した彼は、天皇の行列に和歌を献じて罪に問われた。その後異常な言動をきたすようになる。晩年郷里で子弟に教えるが、菩提寺に放火したのち、座敷牢に幽閉されたまま悶死する。

「宝石の写真」では、青山半蔵の移動した地所をやはり郵便番号を交えて次のように記す。

その事件から二〇年ほど前の「3」。もうひとつの本陣。
「夜明け前」本陣、青山半蔵は397－0000木曽福島町関町の勘定所と、
399－5102山口村馬籠（宿）の往復に明け暮れ、頭部のもつれるときは
399－5102本陣から、397－0201王滝村の里宮へでかけた。39
9－5301読書、399－5502須原、399－5601桟、397－0
101三岳村黒田を通りというように「397」乃至「399」の山里の中で
少しずつ番号を上げ下げして、深山にはいり、宝石の音を聞いた。半蔵はまた238－0022横須賀市公郷の遠い先祖の遺族を訪ね、行き帰り
に「1」台（東京）に入ったが、「1」ではとても疲れた。508－0006
中津川在の香蔵、景蔵に会いに行くときは「3」が「5」になるが、くにが違
うものの、すぐ隣り。

（五連一行目～一一行目）

※「1」は、東京。「2」は、長野県、「5」は、岐阜県である。

五連一行目は、秩父事件革命本陣と「夜明け前」の木曽路の馬籠本陣を関係づけて、「もうひとつの本陣」（五連一行目）と語られる。「夜

明け前」の青山半蔵、秩父事件の三人の人物、現代のさちこともこ、さらには憲法第九条問題、市町村合併の社会問題の意味をつなげるかたちで語られる。秩父事件の人たちや「夜明け前」の青山半蔵は、平凡な人間でありながらそれぞれの時代の日本の実情を真摯に考え、苦悶しながら生きたのである。

三　共時的意味関係

過去の事実を証明するものは文書、墓石・石碑であり、写真である。わずかではあるが、秩父事件にかかわる人物たちの肖像写真、作品、文献資料が残されており、顕彰碑も建てられている。困民党総理田代栄助の墓は秩父大宮郷に、落合寅市の墓は秩父石間に、井上伝蔵の墓は秩父下吉田に、島崎嘉四郎の墓は甲府市若松町にそれぞれ建っている。そして、島崎藤村の墓は大磯地福寺に、父正樹の墓は馬籠の永昌寺にある。秩父市寺尾の音楽寺境内鐘楼脇に困民党決起一〇〇年を記念して建てられた「秩父困民党無名戦士の墓」（昭和五三年一一月二日建立）がある。碑面には、「われら秩父困民党、暴徒と呼ばれ暴動といわれることを拒否しない」と、逆説的意味の文言が記されている。ながい間秩父事件は暴徒事件とされてきたが、研究がすすみ、近年自由民権運動、松方デフレの影響、さらに他地域の養蚕との比較、国際環境の関係で、政治運動としても民俗学的にも意味をもって評価されるようになった。

ところでいま、一八八四年の秩父事件から一二〇年あまり、島崎藤村「夜明け前」の主人公青山半蔵が苦悶した明治維新から一四〇年ほども経っている。「宝石の写真」の語り手が参考にしたのは「最新県別日本地図帳」で二〇〇四年一月の発行、郵便番号簿は二〇〇三年一一月の発行である。北海道網走市（野付牛）の平和という町が命名されたのは一九三四（昭和九）年（「平和部落史」網走市）であり、日本国憲法の発布は一九四六（昭和二一）年一一月、実施は一九四七（昭和二二）年五月である。そして、「平成の大合併」ともいわれる市町村合併が現在なお進行中である。

落合寅市は、困民党づくりの始動者として坂本宗作、高岸善吉らと請願運動にはげんだ。そして、一八八四年九月秩父困民党が結成される。寅市はのち山林集会の展開に尽し、蜂起の際には乙大隊副隊長で活躍した。ところが、板垣退助によって結成された愛国社は、一八八一年自由党に再編されるが、秩父事件直前の一八八四年一〇月二九日（秩父事件の三日前）に解党される。

「三津子先生は、まだ来ないの？」
「まだみたい。各自、練習しておくようにって。ぴいぴい、ぴいぴい」
落合寅市は「3」から、「7」へ移動。縦笛教室は、移動なし。
ただし土
曜日は横笛組が使うから、第二会議室へ仕方なく移る。廊下をすべって移
り行く。移り過ぎる。行き過ぎる。泣く。縦笛を吹く。
（二連六行目～一〇行目）

秩父自由党は困民党を結成して大きく盛り上がるが、中央との連絡を持たないまま突き進むことになる。指導の「先生」は現れるはずはない。秩父自由党は、独自の判断と責任において笛を吹かなければならなかった。蜂起の敗北後、落合寅市は東海道を下って大阪から多度津に渡り、高知に入って板垣退助ら民権家の保護により高橋宅に匿われた。埼玉県秩父から高知県土佐山村に逃亡したのである。

秩父事件の悲劇の顛末をこどもたちの行動に重ねると、「〈笛の練習〉(指揮・扇動)、〈教室移動〉(転戦)、〈廊下をすべって移り行く。〉(本陣解隊・転戦)、〈移り過ぎる。行き過ぎる。泣く。〉(警察・軍隊に攻撃されて敗退・逃亡)」などと推察することができる。そして、副隊長のみさこは秩父事件困民党乙大隊副長落合寅市に、会計長のももこは会計長井上伝蔵に重ねられたものであるが、それぞれの宿命をなぞるかたちはとってはいない。みさこともこの二人の会話や行動はむしろ、現代の社会的課題に向けられている。

井上伝蔵が逃亡して隠れ住んだのは北海道の野付牛である。北海道東部の北見市(旧地名は野付牛)の周辺には、平和、共立、朝日、栄、大和、日出、八重などの地名[4]が(地図上に)見られる。

北見／野付牛周辺の平和、共立、朝日、栄、大和、日出、八重などの地名が第
九条のまぼろしをはためかせる
みんな日本に住んでいたことがわかるね
その人生を生きることよりも先に
この、住んでいたことがわかる。ここで笛、太鼓

(四連九行目〜一三行目)

「宝石の写真」でそれぞれ郵便番号によって記される地点は、意味の関係を共時的に示すものである。秩父事件から民主主義理念を引き、時代を超えて歴史を共有しながら行動する民主主義を求める民衆の心を引き出している。一方、「夜明け前」の青山半蔵が求めた平田篤胤の国学の尊皇攘夷論からは、日本の独自性という意味を引くかたちで物語はすすめられている。「みんな日本に住んでいたことがわかるね」、「その人生を生きることよりも先に／この、住んでいたことがわかる。」という現代的意味に結ばれる。日本国憲法九条が希求する観念と、日本的なものの観念を示す語句が北海道北見市周辺に地名としてある。このことをもって、すでにこの観念が日本にあったことを示す詩的表現で表している。また同時に現代的社会状況につなげる役割をも果たしている。憲法第九条は戦争の放棄をうたっているが、いま、イラク戦争が始まって自衛隊が派遣され、日本の国連理事国入りが表明されたりしている一方、北朝鮮との関係が核開発、拉致問題で難航し、日米軍事再編問題が浮上して、改正の動きがとりざたされるようになった。憲法の改憲論者の主要な論拠の一つに、「現在の憲法が日本国民によって主体的に作り上げられたものでなく、(第二次世界大戦)敗戦国日本に、連合国からおしつけられたものである」というものがある。「みんな」という語は作品中三度使用されているが、ここでの「みんな」は、平和や民主主義の概念がすでに日本に住んでいたことを示し、「ここで笛、太鼓」とコミカルに強調している。

ところで、四連で「夜明け前」の青山半蔵の移動が記されたあと、

半蔵はまた２３８ー００２２横須賀市公郷の遠い先祖の遺族を訪ね、行き帰り
に「１」台(東京)に入ったが、「１」ではとても疲れた。０５８ー００００６
中津川在の香蔵、景蔵に会いに行くときは「３」が「５」になるが、くにが違
うものの、すぐ隣り。土曜日は椅子をもって、隣りの第二会議室へ移動。第一
会議室では横笛の、宝石がぴたぴたと音を出す。

（五連八行目～一二行目）

と、語られている。封建制から近代国家へ移る過渡期の明治維新のころ、国学に心酔する青山半蔵は現実社会に苦悶した。縦笛組を自由民権運動の象徴とするならば、横笛組は日本の固有性を主張する国学に連動する尊皇攘夷論と推察することができる。二人の少女が聞く第一会議室の横笛の練習の音色は尊皇攘夷論であり「みんな日本に住んでいたことがわかるね」（四連九行目）と日本の独自性を意味し、平和も含めてすべての概念が日本にすでに存在していたことを示している。

「平成の大合併」といわれる市町村合併は今なお進行中である。平成一五年五月一日、岐阜県本巣郡穂積町と同郡巣南町が合併して瑞祥地名的な名の岐阜県瑞穂市が誕生した。平成一四年五月一日に当時の本巣郡北方町、同郡穂積町、同郡巣南町の三町で穂積町・巣南町・北方町で合併協議会を設立したが、協議不調により、同年九月二十日に解散した。しかも、当時あまり事例のなかった合併協議会の解散手続が行われた。九月二十五日に穂積町及び巣南町二町の合併協議会を再度発足し、約七ヶ月という短期間で新設合併が行われ瑞穂市が誕生したのである。

なにもかもが終わっても
七つの沼に残る
それが枯れた柱のようでも
激しい市町村合併の挟撃をのりこえて　人は組み立てる
ぴたぴたと土の上に　家のなかへ
縦笛の練習／銃撃はきょうも続く
５０１ー０３１３岐阜県瑞穂市十七条の、副隊長みさこは
５０１ー０３１４岐阜県瑞穂市十八条の、会計長ももこと
口でぴたぴた濡れた縦笛を抱え、暗い道を帰っていく

（六連一行目～九行目）

明治維新は過ぎ、秩父事件は過去のものになり、枯れた柱のようになっても、犠牲となった宿命の象徴である沼は残る。現代の市町村合併の挟撃のなかでも、民主主義の課題を組み立てようとする。濡れた感覚のオノマトペイアは秩父蜂起の血塗られた泥樽のものであり、沼地を走った困民党のものである。「こんなに長く続／けると、わたしみたいに笛のへたな人でも、じょうずになるわね。」、「じょうずだった人が、へたになるの」、「じょうずだった人が、へたになり、」など

のことばを伴ったみさこともこの縦笛は、時代を超え、人を超えて頑なに引き継がれる民主主義運動という隠喩であろう。ちなみに六連七行目の「岐阜県瑞穂市十七条」と、八行目の「岐阜県瑞穂市十八条」は、現実の地名を指すものである。また同時に、日本国憲法第一七条は、「何人も、公務員の不法行為により、損害を受けたときは、法律の定めるところにより、国又は公共団体に、その賠償を求めることができる」とあり、[国・公共団体の賠償責任]を課している。第一八条は、「何人も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない」と、[奴隷的拘束・苦役からの自由]を国民に保障している。憲法第一七条と一八条の住民であるみさこともこは、秩父事件の犠牲者の人権回復と、現代社会においてもなおその精神に反する課題に忙しく戦わなければならない。

二人は楽しそうだ日本でしか生まれない人たちだ
コナラ、クリ、クヌギ、ヒメグリの
宝石
七つの沼も七色のさざなみをたてる
男のかたちは水のなかの子どものように消えた
遠くの山のように低くなり　目に浮かんでも見えなくなった
（七連一行目～六行目）

所詮人間はコナラ、クリ、クヌギのような雑木である。「(泥をはねて)ああなにか土台になるようなことをしたい／わたしはいいな／そんなことより／(笛の器量を上げながら)なにもかもが／なにかの土台になるような、ああそんなことになりたい」（七連一行目）と、二人の少女はいう。彼女たちの会話のように勇敢にも社会の土台になるような野望をいだいたり、素朴に何でもいい何かに役立ちたいと願うのは、平凡な人間がふと考える心でもある。「二人は楽しそうだ日本でしか生まれない人たちだ」と、二人はあどけなく楽しそうに日常を生きる。二人の少女は、日本で生まれ、日本で生活する平凡な人たちの民主主義と平和をを希求する心の象徴である。

山々の模様のなかに５０１－０３０３森、が見える
余った手を出して５０１－０３０７岐阜県本巣郡巣南町唐栗、をとる
縦笛の二人は女のかたちで横になる
また起きて
ぴちゃぴちゃと歩く
（八連八行目～一二行目）

物語の最終部は極めて幻想的な場面となる。瑞穂市のみちこともこに寄り添う語り手は、山々の景色のなかに「森」（地名と重なる）を眺め、手を伸ばして栗（地名と重なる）をとる。縦笛の少女たちは一旦横になり、女のかたち（女性が寝た形）の稜線を描いて景色に溶け込もうとするが再び起きあがる。現代に生きる二人の少女は、宿命の濡れた音をたてながら歩きだす。民主主義運動の縦笛を持つ二人の少女は、

秩父事件が過去のものとして、「男のかたちは水のなかの子どものように消えた」（六連五行目）としても、景色のなかに埋没するわけにはいかない。

おわりに

荒川洋治は、「心理はときどきの人の心からは、遠いものかもしれない。また、まわりにあるものをうけとめながらも、うけいれられない。そんな一瞬あるいは長引くものを、人はかかえることがある。」と、あとがきに記している。「宝石の写真」は、たまたま手にした秩父事件にかかわる資料を読み、写真を眺め、「夜明け前」を想起し、地図で場所を追い、新聞を読む。「宝石の写真」は、その一連の行為のなかに生起する心象そのもののようである。「宝石の写真」は、三つの意味をもとに構成されていた。秩父事件と島崎藤村「夜明け前」の国学、そして憲法第九条、市町村合併という現代社会の課題である。それら三つの意味を語る物語は、「コナラ、クリ、クヌギ」という雑木の観念（平凡な人々の生き方）で関係づけられていた。現代に生きる二人の少女の日常生活を事件や物語と共時的に描いた。そして、郵便番号というコードで地所を結ぶことによって民主主義運動という不思議な幻影を浮かび上がらせる。郵便番号は、読者に不可解さを感じさせるものとなっているが、住民基本台帳のように人間のありようを合理化し、記号化すること、市町村合併で地名が消えていく現在の風潮へのイロニーと読むとができる。

荒川洋治は「秩父」（『忘れられる過去』（みすず書房二〇〇三年七月）というエッセイで、次のように書いている。

こうして書くだけで、胸が熱くなる。どうしてぼくは、この事件にひかれるのだろうか。はじめはともかく、最後は自分の頭で考え、考えただけではなく人々のために実行し、犠牲になった人たちの生き方にぼくは打たれるのだ。自分にはできないことなので、あこがれているのだ。いろんな理不尽なことが身のまわりに、社会にあるのに、ほとんどの場合、黙って眺めてぼくは生きている。なにもしない。そんな自分であることを知っておくため、確かめておくために蜂起した人たちのことを、その人たちの思いを心に残しておきたいのかもしれない。

エッセイではこのように情感豊かに表現されているが、「宝石の写真」は、人物の動きを郵便番号で表したり、客観的な文体で描いたりして、作者の主観は極力退けられている。そのことは逆に読む者が興味を抱き、少しずつ読み解かれ、意味が再構築されることによって心のなかに情感が生成されるように工夫されている。

複雑な社会状況をあらわす現代であるが、詩の形で過去の秩父事件とともに現代の社会的課題を提起する作品である。

注

（1）秩父事件にかかわった三人の物色票（いわゆる手配書）である。

落合寅市

1探偵報告

埼玉県秩父郡石間村加藤織平に収録

2物色票

郷貫氏名　下吉田村博徒

（半根子）（寅）ハン子ツコ帋市

三十四年位

妻　子　アリ

容　貌　丈大　肉　肥タル方　量目十七八貫　顔　顋コケタル方

色白　頭髪散髪　鼻　並　痘痕ナシ

眉太ク　耳　並　目　口　大

唇濃ク　歯　並揃フ　言舌秩父言葉　音聲高シ

総身傷痕　ナシ　黒子之類　不分　刺繍ナシ

親戚縁故立廻リ先見込　秩父小鹿〔野〕町ノ近在飯屋村ヨリ聟二来タリシモノナリ

〔『明治十七年秩父暴徒犯罪二関スル書類編冊警察部』〕

島崎嘉四郎

物色票

郷貫氏名　埼玉縣武蔵國秩父郡上吉田村字チガヤ（千鹿谷）嶋崎　嘉四郎

二十六年位

職　業　農

妻　子　不持

容　貌　丈五尺位　肉　肥タル方　量目　〃　顔　丸キ方

色浅黒キ方　頭髪散発　鼻　高キ方　痘痕ナシ

眉太厚キ方　耳　常　目　大キ方　口　並

唇　歯　不揃　言舌　〃　音聲高キ方

〔『明治十七年秩父暴徒犯罪二関スル書類編冊警察部』〕

井上伝蔵

1探偵報告

埼玉県秩父郡石間村加藤織平に収録

2捜査、逮捕方手配

（1）手配方依頼

秩父郡下吉田村字井上

會計長　井上傳蔵

一　年齢三十二三　一　顔長ク白キ方

一　男振ハ美ナル方　一　丈高キ方

一　歯並揃ヒタル方　一　散髪髪毛色濃ク

一　鼻高キ方　一　眼大なる方

『明治十七年　秩父暴徒犯罪二関スル書類編冊警察部』罫紙

3物色票

郷貫氏名　下吉田村字井ノ上五加

井　上　傳　蔵

四十三歳位

職　業　農

妻　子　アリ

容　貌　丈並　肉並　量目並　顔　長ク鬚アリ

色白　頭髪散発赤毛分タル　鼻　大　痘痕不分

眉太　耳　並　目　クルリトシタ方

口並

唇厚ク　歯　白シ　言舌秩父　音聲並

総身傷痕　不分　黒子之類　不分

親戚縁故立廻先見込　不分　刺繍　不分

〔『明治十七年秩父暴徒犯罪二関スル書類編冊警察部』〕

（『秩父事件史料集成』第一巻一九八四年二月、第二巻一九八四年六月　二玄社）

（2）筆者は、一連二行目、六連二行目、七連四行目の「七つの沼」を秩父事件で死刑宣告された七人の深い悲しみに閉ざされた境涯と解釈した。しかし、「列島各地へ散らばった人の、七つの沼の」（一連二行目）という文のかかわりと、落合寅市と島崎嘉四郎は、死刑宣告を受けた人物ではないので疑問が残る。あるいは登場人物の移動した地所とも考えられるが場所が特定できず、七つの沼を死刑宣告の七人の沼とした。また、七という数字は郵便番号の七桁の数字にも重ねられている。

(3)一八七五(明治年八)年五月札幌郊外の琴似兵村へ入地が開始され、一八九七(明治三〇年)屯田兵第四大隊が常呂郡野付牛紋別郡に置かれた。「ノツケウシ」は漢字で書けば野付牛であるが、アイヌ語の「野の果て」という意味であるという。

(4)北海道網走市平和。北海道常呂郡共立。北海道北見市朝日町、北海道北見市栄町、北海道北見市大和、北海道常呂郡訓子府町日出。北海道遠軽町(紋別郡)生田原八重八重。荒川洋治は詩集『娼婦論』(一九七一年)、詩集『水駅』(一九七五年)等で地図をたよりに創作したものであるが、この「宝石の写真」も資料として示されている通り分県地図などが用いられている。

参考文献

井上光三郎『写真で見る秩父事件』(人物往来社昭和五七年六月)
浅見好夫『秩父事件史』(言叢社一九九〇年一一月)
『秩父事件ー圧制ヲ返ジテ自由ノ世界ヲー』(秩父事件研究顕彰協議会二〇〇四年八月)
保高みさ子『秩父事件の女たち』(講談社一九八八年一月)
『秩父事件』(秩父事件研究顕彰協議会二〇〇四年八月)
春田国男『幻歌行』(あゆみ出版一九八四年一一月)
中沢市朗『秩父事件探索』(新日本出版社一九八四年一〇月)
井上幸治『秩父事件』(〈中公新書〉中央公論社昭和四三年五月)
『島崎藤村集(二)』(〈現代日本文學大系14〉筑摩書房昭和四五年一月)

付記

井上伝蔵の家族写真は、『写真で見る秩父事件』の著者井上光三郎氏に依頼しご協力をいただいたものである。厚く感謝いたします。

(よしだ　たかし、広島大学大学院博士課程後期在学)